

14教授 教壇にお別れ お世話になりました



創立者たちのエピソードを語った土方教授



講義を終えて花束を贈られ笑顔の小澤教授



「自由への抑圧と徹底して戦おう」-児島教授



別れを惜しむ学生に囲まれた玉水教授

木々の芽吹く3月。長年のあいだ学生を指導、真理の探求に情熱を注いでこられた14人の先生が、惜しまれながら定年で教壇に別れを告げる。

卒業生と時を同じくしてキャンパスを去ったのは◇経済学部が土方保教授、宮下誠一郎教授の2人◇法学部が岡部達味教授、松岡誠之助教授、宮坂宏教授、山崎悠基教授の4人◇経営学部が石川敏男教授◇商学部が小澤康人教授、川田秀雄教授、山下文明教授の3人◇文学部が阿部正美教授、児島和人教授、高橋貢教授、玉水俊哲教授の4人。このうち4氏が最終講義を行った。各教室には、多数の学生が詰めかけ、講義後にはゼミ生からの花束贈呈や記念撮影、先生を囲んで歓談の輪が広がるなど、別れを惜しむ光景が続いた。商学部の山下文明教授には思い出を語っていただいた。

4教授の最終講義は、昨年12月19日、生田キャンパスで一斉に行なわれた。

土方保経済学部教授は「田尻稲次郎と金融論」と題し、明治13年に日本最初の私立法律経済専門学校として創立された本学の経緯や、創立者の一人、田尻稲次郎氏たちの活躍を紹介しながら、当時の金融情勢を詳述。田尻氏が日本で初めて金融論を講義したことなどを明らかにした。

小澤康人商学部教授は会計史(佐々木重人教授担当)の授業内で「専修大学における会計学研究の歩み」と題し特別講義。本学が「計理の専修」と呼ばれる歴史的背景を中心に、ユーモアを交えながら披露した。

玉水俊哲文学部教授は社会学研究の立場から「モノと人と関係と～支配の論理と連帯の論理にむけて～」と題し、同教授が学生時代に土門拳の写真集を見て感動。筑豊の炭住街に入って社会調査し、抑圧された人々の生活のなかからモノを考えたことなど、自らの立脚点を明らかにしながら労働者生活研究の足跡を振り返った。

児島和人文学部教授は「コミュニケーション論」と題し、ツールとしての言語が、各状況下でどのような役割を果たし、また影響を及ぼすかを論じ「日本には物言わぬ風土が存在するが、自由を抑圧する国、集団には徹底して戦わねばならない」と締めくくった。

私と専修大学 国際化へチャレンジ 商学部教授 山下文明

入職した63年(昭38)には法、経済、経営の3学部編成であった。その頃、外にあっては安保闘争、そしてやがて大学紛争の強風が吹き荒れることになる。内においては大学の国際化動因の展開が大きな潮流になっていた。

65年(昭40)、学術友好使節の企画があり、大学の命でインドネシアに派遣された。香港経由でジャカルタに向けて出発したのは夏であった。長期在外研究時には育友会誌にハンブルク通信を寄稿したことや「国際の社」への留学生による卒業記念植樹などが記憶に残っている。

私の専修大学での思い出は、国際化へのチャレンジだったと今、思い返している。

グローバル化するこの社会に生きる学生諸君にも、さまざまな経験を積んでもらいたいと願っている。

[3月27日/ニュース専修2面]

